

令和3年 4年度期 第2回 世田谷区子ども・青少年協議会 会議録

開催日時

令和3年12月22日(水) 15時～17時

開催場所

世田谷区役所 区議会大会議室

出席委員

入澤充 志村健一 阿久津皇 高橋昭彦 中山みずほ 田中優子 林大介

森岡美佳 臼井昌章 明石眞弓 岡崎美恵子 藤原由佳 勢能克彦 廣岡武明

下村一 奥村啓 新井佑 近藤三知香 丹羽有彩

事務局

子ども・若者部長 柳澤純 児童相談所長 土橋俊彦

生涯学習部長 内田潤一 若者支援担当課長・子ども育成推進課長 山本久美子

児童課長 須田健志 子ども家庭課長 中西明子

児童相談支援課長 木田良徳 生涯学習・地域学校連携課 谷澤真一郎

会議公開の可否

公開

傍聴人

0人

会議次第

1 開 会

2 議事

(1) 本日の議論の到達点の確認

(2) 第1～3回小委員会を受けたモデル事業(案)について

3 その他

4 閉 会

午後3時開会

事務局 それでは、定刻になりましたので、令和3年 - 4年度期第2回世田谷区子ども・青少年協議会を開会いたします。

本日は、お忙しい中、ご出席いただきましてありがとうございます。議事に入るまでの間、事務局として進行を務めさせていただきます若者支援担当課長の山本でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

開催に当たりまして、一言、子ども・若者部長の柳澤よりご挨拶を申し上げます。

事務局 子ども・若者部長の柳澤でございます。皆様におかれましては、師走のお忙しい中、子ども・青少年協議会にご出席いただきまして、本当にありがとうございます。また、日頃より、区政に対しまして、また、子ども・青少年施策に多大なるご尽力を賜り、心より感謝申し上げます。

世田谷区では、先週土曜日、12月18日に、若者支援シンポジウムを開催いたしました。今回は「コロナ禍の居場所のチカラ～聴いて、伝えて、考えよう、若者の声～」といったテーマを設定いたしました。当日は、オンラインの併用もございまして、地域で活動する支援者から当事者である若者たちなど、多くの方にご参加いただいたところでございます。

さて、今期の子ども・青少年協議会は、「若者とともに変わる地域～若者の視点で」というテーマで検討をいただくことになってございます。小委員会委員の皆様には9月より毎月お集まりいただきまして、ご議論を深めていただいております。昨年度は新型コロナウイルス感染症の影響を受けまして、当初予定しておりました手法についても見直しせざるを得ない状況となりましたが、そこから見えてくる視点、また、課題もたくさんございました。委員の皆様におかれましても、ぜひそれらの見地を引き継いでいただきまして、若者の意見表明、参加、参画の視点による提言、施策案の具体化を進められますよう、活発なご議論をお願いしたいと思います。

どうぞよろしくお願いいたします。

事務局 ありがとうございました。

では、まず、本日の協議会の出欠の状況でございます。本日は、事前に、大原ななえ委員、膳場美帆委員、渡邊明宣委員、田谷雅弘委員、増田名那委員の5名から欠席のご連絡をいただいております。また、まだご到着されていない委員の方が3名ほどいらっしゃいますが、全体で2分の1以上の委員の方にご出席いただいておりますので、本日の会議は

成立ということでさせていただきます。

本協議会ですが、会議録を作成するに当たりまして、正確を期すため速記者を出席させることをご了承願いたいと思います。

また、ご発言の際には事務局よりマイクをお渡しいたしますので、ご協力をお願いいたします。

本日の資料は、次第に記載のとおりでございます。協議会の進行に合わせご紹介させていただきますので、ここでは一つ一つ読み上げはいたしません、その都度、不足や不備がございましたら係員にお知らせください。

それでは、早速、本日の議事に移らせていただきます。これより先は入澤会長へ進行を引き継がせていただきます。入澤会長、どうぞよろしくお願いいたします。

会長 入澤でございます。よろしくお願いいたします。

それでは、第2回目の協議会を進行してまいりたいと思います。今ご説明がありましたように、小委員会が9月から今回まで3回開催されました。まずは小委員会で議論されたことなどを詳しくお話しいただき、本日の議題を皆さんと共有してまいりたいと思います。

今、私の勤めている大学、あるいは高等教育では、「質の保証」ということが評価の対象とされております。学生の学習成果の可視化、何ができるようになったかということが認証評価に求められているわけですが、各大学は、その指標として、高校までの学び、その学びや知識に伴ってどのような行動特性が取れるのかなどなどを調査しています。この結果を見ていますと、懸念を要する若者、高校生、大学生が増えてきていることが分かります。つまり、自己肯定感の低い学生たちが大変増えているということを感じます。そのような学生に対して、大学は入れた以上、責任を持って卒業させていくという手だてを取らなければなりません。本協議会も、若者たちが地域に出てきて自己肯定感を持てるような仕組みづくりが小委員会の議論の中から出てきているのではないかなと思います。本日も実りある議論を皆さんとしていきたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

それでは初めに、小委員会での経過と意見を基にまとめられた2つのモデル事業案についてお話しいただきます。本日の到達点としては、今期のテーマについて、小委員会が検討したモデル事業案について、まとめるところまで持っていきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

それでは、小委員会委員長からご説明をお願いいたします。また、モデル事業案の検討に当たり、北区での活動を視察に行かれたようですので、併せてご報告いただければと思います。それでは、小委員会の振り返りをお願いしたいと思います。

副会長 ありがとうございます。志村です。

私からは、小委員会でのこれまでの検討状況について報告をさせていただきます。皆様のお手元の資料1-1から1-3に第1回から第3回までの小委員会の記録がございますので、詳細はそちらをご覧くださいといたしまして、まず、資料3のまとめ図をご覧くださいできればと思います。令和元年から2年度までの前期、「『若者の力が活きる地域』実現のため区が取組むべきこと」等々ありますけれども、こういったことを受けて、今年度、3回までの小委員会を開催させていただきました。

資料1-1を見ていただきますと、第1回の小委員会の記録が掲載されております。9月3日に、希望丘青少年交流センター「アップス」で施設の見学等を交えて開催させていただきました。第1回の小委員会では、今期のテーマ「若者とともに変わる地域～若者の視点で」に即しまして、若者、地域について意見交換を行いまして、今期の検討で目指すことについて議論をいたしました。資料1-1の2ページ目を見ていただきますと、5番目に意見交換という項目がございます、若者にかかわる意見、地域にかかわる意見という2つの枠組みの中で意見が掲載されております。つまり、これは「若者とともに変わる地域」というふうにお題をいただいているわけですが、一体、若者って誰なんだろうか、地域ってどこなんだろうか、こういったことをすり合わせる必要が出てきましたので、それをまず最初の第1回の委員会の中で話し合ったということでございます。

続きまして、第2回の小委員会です。こちらは資料1-2をご覧くださいければと思います。10月26日にメルクマールせたがやで、これも施設の見学等を交えて開催させていただきました。第2回の小委員会では、前期までの取り組みや課題、8つの提言について整理をしつつ、今期のモデル事業検討に向けたアイデアを出し合いました。

各委員からモデル事業の提案をいただいたわけですが、資料2に一覧が掲載されております。継続か新規か、どんなタイトルか、ターゲット、場所、協力相手等々が一覧にまとめられています。これは小委員会の委員の皆さんに宿題という形で投げかけさせていただいたわけですが、出てこないのではないだろうかと心配して、私も一つぐらいは出さなければと思った次第ですけれども、実際にはこれだけの案が出てきたということになります。この資料の提案をまとめたのが、先ほどの資料3の中段にあります「あるといい場、

取り組み」になります。前期までの取組である商店街、学校での事業のほか様々な提案をいただきましたけれども、議論の結果、やはり商店街、そして学校はあるといい場所の大きな柱になっていくということが確認されました。

第3回目の小委員会では、これらの提案を基に議論を進めました。具体的な案の検討、絞り込みを行う上で、落としてはいけないポイントが確認されました。落としてはならないポイントとして、先ほど、第1回の小委員会とも重なりますけれども、対象となる若者はどのような若者なのか。そして、入澤会長からも若者の肯定感という言葉がありましたけれども、若者自身がやりがいを感じ、能動的、自発的に取り組んでいける要素があるかどうかということ。あるいは、忙しい若者は本当に忙しくて、授業があり、アルバイトがあり、自らの楽しみがありますが、そういう状況の中にあっても、若者が参加したくなるインセンティブが働いているかどうか。また、これがモデル事業だけ、一発の花火だけで終わるのではなくて、モデル事業実施後も継続的にやっていけるかどうか。そういった体制が組めるかどうか、また、今期のお題である若者ととも地域自身が変わっていく可能性があるかどうか。あるいは、地域の変化に若者が関わっていくことを促せるかどうか、こういった視点を確認して検討を進めた次第です。

多くのモデル事業の提案が出たことを先ほど申し上げましたけれども、幾つかのものは合体して進めることができるし、並行して進めることもできるなど様々な意見を交わしまして、検討の結果、大きく分けて2つ、学校カフェ、そして商店街でのモデル事業を小委員会からは提案させていただきたいと思います。具体的な検討内容につきましては、この後、小委員会の委員よりご説明いただければと思います。

モデル事業の提案に当たって、小委員会副委員長から補足があればお願いしたいと思えます。

委員 今、小委員会委員長からモデル事業のこの間の検討について報告いただきましたが、その際に資料2について触れていただいております。今回、モデル事業を検討するに当たって、小委員会の委員の皆さんからどんなことができるのかということでアイデアを出していただき、小委員会で話し合った結果、2つに絞った内容での提案になりました。資料2に書いてある1番から20番までの事業も実は魅力的で、今回のテーマである「若者ととも変わる地域」という中では、区内全体で、いろんな場所で、さらにこれ以外のものもきっとあると思うんですけれども、活動が動くことがすごく大事なんだろうなと改めて感じております。

とはいえ、今回のモデル事業では、この20を全部やるわけにはいかないため、絞った上での2つの提案になるんです。要は、今後の議論の中で、お金なのか、場所なのか、人なのか、いろいろ課題はあると思いますが、今回絞った2つのモデル事業をやることを通じながら、こういう20、あるいはそれ以上の事業を区域全体で広げていくためにどうしていったらいいのかを併せて検証していくことが、今期のモデル事業の中で課せられている課題ではないかなと思っております。本当に魅力的でやりたいんだけど、今回はできない、あるいはいろんな人のつながりがあって難しい部分もあったりするんですけども、こういったものも今後はやれる体制をぜひつくっていききたいなという前提の上で、この後、モデル事業の提案をしていただきたいなと思っております。

会長 どうもありがとうございました。

それでは、今、お示されたモデル事業について、各委員からご説明いただきたいと思っております。まず、資料3からお話しいただけますでしょうか。

委員 今年度、「若者とともに変わる地域」ということで、モデル事業の2つのうちの学校カフェについて説明させていただきます。若者たちが意見表明できる場所として、学校カフェはいいんじゃないかということ、前期に発案したという経緯もあって、今回も引き続き行うべきではないかということで、2つのうちの1つになりました。学校でも家庭でもないところは、よく第3の場所と言われています。前期は、学校に近い、そんな離れたところじゃなくて意外と親近感のある場所、2.5の居場所がいいんじゃないかと、学校に行けない子もいるだろうし、地域で若者たちの話を聞いたり、寄り添ったりしていったほうがいいんじゃないかということで、学校カフェを提案させていただきました。

検討していくに当たって、世田谷区全区で学校カフェをやるときには、中学校で開催した場合がいいのか、高校で開催した場合がいいのかとか、いろいろ詰めてはいけないところがありますので、そういったところは本会議で皆様のご意見をお伺いして、詰めていきたいなと思っております。何度か話がありましたけれども、資金はどうしたらいいんだとか、あと、継続してやっていくためには人材はどうしていったらいいのかとか、そういうところも詰めていかなければいけないかなとは思っております。根本的には、子どもたち、若者たちに対して、学校はどうしても指導が入って何々しなければいけないという空間なんですけれども、そうではなくて、福祉の形の寄り添いということで参入できたらいいのかなと思っております。

以上です。よろしく申し上げます。

会長 ありがとうございます。

続きまして、モデル事業案の説明をお願いしたいと思います。

委員 商店街における居場所の案1になります。商店街の中に若い人たちが歩いているような風景をなかなか見なくなっています。自然に若者が訪れて地域の人と交流できるような風景をつくりたいねということで、商店街で何とかしたいと考えました。いろいろな良いアイデアは皆さんから上がっているんですけども、実現するためには、小さくても継続するような営みがないと難しいよねということで、では、小さい営みって何だろうということで話し合っていました。そこで、駄菓子屋さんというアイデアがあります。駄菓子屋さんは売値も仕入れ値もほとんど決まっていて、そんなに儲かるものではないけれども、小さなスペースですぐできる。去年9月にイベントでみんなですけれども、何のインストラクションもなく来てくれた人がみんな店番ができたんです。ちなみに、不意に寄ってきたどこのお子さんか分からない小学校の女の子も、店番を務めてくれて十分こなせていました。お店屋さんの営み、経済の最小単位を学べるという意味でも、自己肯定感が高まるような楽しみ、そして、いろいろな陳列の工夫など、自分で稼ぎ出してみたいな体験ができると。それから、元気な方ばかりじゃなくて、バックヤードが得意な人とかもいらっしゃる。多様な若者に仕事場を提供できる最小単位の小商いとして、駄菓子屋さんみたいなものができるといいねという話をしました。しかも、駄菓子屋さんはオールターゲットで、やってくる人も小さいお子さん連れだったりもするし、昭和世代の人もいたりとかして、結構交流が生まれてお話も生まれてきそうな感じがいたしました。

そして、セカンドステージとしては、駄菓子屋さんでうまく小さい商いを学んだ人たちが、その商店街の中で、うちはちょっと人手が足りないから店番してよみたいなお声かけによって、商店街全体のインターンみたいな形で店番ができるような循環が生まれてくると、非常に自然に若者と商店街の地域の人がウィン・ウィンになれるのではないかなというイメージを共有しています。

そして、この話の中で、そうした拠点があると、若者がお金を稼いで経済を回すことのほかにも、そういうことがなかったとしても、商店街全体の職業体験みたいなことが企画できるのではないかというご意見がありました。小学校と連携してリアルなキッズニアみたいなものだったり、障害のある方たちの職業訓練みたいな形でも、商店街さんのご協力が取り付けやすいのではないかというのは、前回、小委員会にご参加いただいた委員から

もご意見をいただきました。

ということで、一番小単位の商いで、すぐできるモデルで、店舗の一部のスペースをある時間帯に貸してくれるところにもお声がけをしながら、世田谷区の中に駄菓子屋さんで自然に交流するような風景をつくっていききたいというのが案1になります。

会長 ありがとうございます。

それでは、続いてお願いいたします。

委員 商店街で同じようなカフェみたいなものをやりたいという案です。若者ととも地域が変わるということは、若者が地域に対して影響力を発揮できる場所が必要で、その土台には、やはり若者と地域の方たち、若者同士の交流の場をできるだけ大きくつくる必要があるんじゃないかと思います。そのためには、コミュニティカフェみたいなものは若者も非常にずっと入りやすいだろうし、人通りが多いところであれば、地域の方たちもちょっと寄って行ってくださることもあるんじゃないかということで、コミュニティカフェについて考えていきたいと話しました。

この議論の中で若者から出た意見は、やはり若者が多く集まるような場所でやりたいということ。ただ、どんなコミュニティカフェにするのか、どんな仕掛けをして多くの人に来ていただくのかということについては、そこをやってみたい若者の意見を聞きながら進めたいということで、とにかくまず場所を確保しようということになりました。それから、若者が何かそういう主体的な活動をするときにハードルが高いと、いや、ちょっとそれはできませんということが多いので、例えば、1日とか2日とか短い期間でもいいから、そこで何か自分たちのやりたいことをやる。それを幾つかのグループが、例えば、1週間、2週間お店を開けてみるみたいなトライアルの仕方で、そこで得られた知見を基に、またその次のステップというのは十分に考えられるんじゃないかということで、どんなコミュニティカフェになるかは分かりませんが、若者が本当に主体的になれるようなコミュニティカフェをやりたいという話になりました。

お金も、ある程度若者が自分たちで計算して稼ぐということもあれば、地域の方からペイフォワードのように若者を応援するよというようなチケットを置いていただくようなこともしながら、経済的にもちゃんと回せるようなモデル事業ができたらいいなと考えております。

以上です。

会長 どうもありがとうございました。

今の件についても後で議論していきたいと思いますが、次に視察報告です。委員と副会長にお話しいただければと思いますが、それでは、委員から視察報告をまずお願いいたします。

委員 資料4の写真に基づいて報告をさせていただきます。12月7日火曜日、平日なんですけれども、朝の9時から、副会長もいろいろと関わりをされている、北区の桐ヶ丘サロンあかしやに視察に行っていました。

1枚目の写真は桐ヶ丘中央商店街の正面の入り口になりますが、この後ろ側が幅10メートルぐらいの道路で奥行き100メートル弱ぐらいになりますか、両側に店が並んでいて、まさに商店街なんです。かつては非常ににぎやかな商店街だったろうなという面影はあるんですけれども、実は最近、この周りの大型団地の高齢化によって、ここはシャッター街になっている状況です。

次の写真ですが、サロンあかしやが今申し上げた商店街の真ん中辺にあって、ここでいろいろ活動が行われているわけなんです、この写真は朝のイベントが開始される前でテーブルとか椅子が置かれています。ここは昔、明石屋というおそば屋さんだったそうです。それで、今から約5年半ほど前に、明石屋というおそば屋さんから場所の提供があったそうです。要は貸してもいいよという話があって、それ以後、活動を続けているということなんです、現在は、地域包括支援センターとか社会福祉協議会も入って、3つの社会福祉法人が主体となって運営しているということです。コンセプトとしては、資料によりますと、地域みんなが気楽に立ち寄れる、SOSを出せる場所としてスタートしたそうです。ここで高齢者から子どもまでを対象にした本当にいろんなイベントが行われています。ここ1、2年は大分コロナの影響を受けているそうですが、それでも、今でも続いているということです。

次に、右の写真の3枚目にカフェレストラン長屋というのがあります。これは今説明したあかしやのまさに隣にあるんですけれども、知的障害者を支援している社会福祉法人が運営していて、知的障害の人がここで飲物とか食べ物、ケーキを作り、活動している隣のあかしやに提供するという運用をしているようです。

下の一番左の「朝活の様子」は、当日の朝活の様子です。参加者が多く、かなりの人数に私も驚きました。平日の朝なので高齢者が多いんですが、若い福祉関係の大学生も、講義の関係で何人か見学に来ていました。当日はインストラクター的な人が前にいて、みんな体操するというので活動していて、決まったことをきっちりやるのではなく、緩

やかに運営されている感じが印象的でした。事務局の方もインストラクターとして借り出されまして、たしかズンドコ節だったと思いますけれども、みんなの前で踊ったりしていました。

次に、下の段の真ん中の「朝活の様子」を見ていただきたいんですけども、これは先ほど説明したカフェレストラン長屋で障害の方々が作ったケーキをあかしやの前で売っている様子です。飲物ももちろんあるということです。

一番右の「朝活の様子」は、体操が終わってくつろいでいる様子です。何時に終わったからみんな帰るという決まりはなくて、何となくばらばらとみんな帰っていくという状況です。

私は、こういうところを見るのは実は初めてなんですけれども、見た印象として、場所ありきではないと思うんです。あくまでイベントありきということだと思うんですけども、こういったあかしやという元おそば屋さんの場所があることが、いろんなイベントをやっていく上での継続性、それから発展性 発展性というのは、人的にも、組織的にもいろいろ広がりを持っていくということ という観点からすると、こういう場所があることは非常に大きなポイントなのかなという気がしました。

以上です。

会長 ありがとうございます。

それでは、副会長、お願いいたします。

副会長 今、委員からご紹介がありましたように、12月7日朝9時から、委員、事務局に来ていただきまして、朝活に参加していただきました。北区さくら体操とラジオ体操第1、きよしのズンドコ節を踊っていただいたということでございます。今お話にもありましたが、平日の朝9時のイベントですので、基本的には高齢の方々と地域で興味のある大学生たちが集まっている状況です。子どもたちも少しずつ認識していますけれども、あそこは何となく高齢の方々が集まる場所なんだみたいなイメージになってしまっていることも否めない状況です。

地域の声としては、学習面で心配な子どもたちもいるわけですし、そういった子どもたちに対して、この場所を使って夏休みの宿題会などもやっております。当然、夏休みの宿題だけで終わるわけではありませぬので、継続的な支援が必要なんですけども、場所があるから、そういった可能性も探れるわけです。ちょうど今日チラシが回ってきたんですけども、桐ヶ丘クリスマス会というイベントが12月25日に計画されています。これは、全部

あそこ集っている地元の大学生たちが企画しているんです。当日は、スマートボールをやったり、射的をやったり、魚釣りをやったり、あるいは、子ども食堂の関係の子どもたちに対してはクリスマスプレゼントを渡そうとか、そんな状況になっています。今週の火曜日、おとといの朝活のときに、私はおやし倶楽部のメンバーとして参加しているんですけども、おやし倶楽部にもサンタのコスチュームで手伝いに来てくれないかという要請がありました。まさに、若者が主体となって何かやりたいねということがこの場所があるからこそできると。そこにふだんから関わっている方々は、じゃ、手伝うよという形で広がっていく流れになっていますので、一つ参考になる活動がこの桐ヶ丘のあかしゃから見えるかなと思って、紹介させていただきました。

以上です。

会長 どうもありがとうございました。事務局からこの話を聞いたときに、思わず50年前のことを思い出しました。実は、私が大学1年生のときに、今、勢能委員がにぎやかだったとおっしゃった頃、ここでアルバイトをしていました。ですから、すぐにあの場所だというのが分かって、懐かしく感じました。

それでは、これから全体討議に向けていきたいと思います。第1回の協議会で、今回のテーマ「若者とともに変わる地域」について様々なご意見をいただきました。世界はとどまることなく変わっていくのだ、それを若者と一緒につくり上げていくことを考えていくのだというご意見がございました。どうしたら「若者とともに変わる地域」を実現できるのか、3回の小委員会で検討され、本日、2つのモデル事業をご提案いただきました。活発な議論が交わされ、絞られた提案ですので、これをベースに皆さんからご意見をいただき、今後の小委員会でのモデル事業具体化に向けて取り入れたり、軌道修正したりできればと考えております。

ということで、ここから討議に入りたいと思います。「若者とともに変わる地域～若者の視点で」の実現に向け、来年度取り組むモデル事業について、まず、小委員会に参加されていた委員の皆様より、第1回から第3回小委員会での検討を通してお感じになられたことなど、ご意見をお願いしたいと思います。私から指名させていただいてよろしいでしょうか。それでは、区民委員からよろしいでしょうか。

委員 前期のテーマが「若者の力が活きる地域」ということですのでよく考えてきて、私は学校カフェに関わらせていただきました。小学生は、世田谷区では放課後にBOPという仕組みがあって、学校から帰ってからスイッチをオフにして遊べる場所があって、学校

でもない、家庭でもない姿というのをBOPで見ることができます。中学生になると、公立の中学校では部活でその辺を賄おうと思っているのかもしれませんが、部活だとどうしても指導のほう为中心になってしまいます。やっぱり線が細かったりするところは寄り添ってあげなくちゃいけないのかなと思っているんです。あと、高校生は世田谷区からぼんと抜けちゃって、いろんな施策とか考えがあるのか全然分からなくなってしまって、大学になると、違う地方から世田谷区に来るというところで、どうしても見えてこない部分がある。あと、高校、大学というところでは、世田谷区はぼんと抜けちゃっているかなと思っていて、そこをどうフォローしていくのかなと思ったときに、世田谷区では地域に開かれている学校というところをうたっていますので、どうしても行けなくなった子とかは時間帯を変えてとか、そういう感じでフォローしていける場所が近くであればいいなと思います。そのときに食べ物とかがあったら話が弾むのかなというところから、カフェというのが私自身はとてもいいのかなと思います。飲み物だけじゃなくて食べ物もあつたりすると何となくほっとして、言えなかったことが言えたりするのかなと思いますので、こちらをぜひとも実現したいです。

以上です。

会長 ありがとうございます。

続きまして、よろしいでしょうか。

委員 ありがとうございます。私は、コミュニティカフェのグループに入って討議いたしました。この中で、若者に役割が必要だよなということ、それと、若者の意見をちゃんと聞きましょうということが主な議題だったと思います。今日も、見渡すと若い方が来れないという現状があります。中でも、大学生がこの会議にそもそも参加、参画できないということがやはり問題ではないだろうか。この会議を開くに当たって、大人の都合で会議をしている。その中で若い人の意見を聞きましょうと言っても、環境が整っていないのではないかということと、若者がそこにいるということは、何かの時間を犠牲にして意見を述べに来てくださっているということも、やっぱり大人として考えなければいけない課題ではないかということが提起されました。

コミュニティカフェに戻りますけれども、先ほどおっしゃったように、ハードルを低くして、短い期間で、委員も、若者も負担にならない感じで私は今後進めていけたらいいのかなと思うのと、やはり対等な関係をどのように若い人とつくっていくかということで、若者とともに変わる地域というものがつくられていくんじゃないかなと思いました。

会長 どうもありがとうございました。

続きまして、お願いします。

委員 私も、モデル事業の宿題をいただいたときに、商店街の空き店舗というところから、2番目のみんなで朝ごはんというのを提案させていただいたんですけども、商店街で何かできないかという方向で考えてみました。今回、案で駄菓子屋さんと、コミュニティカフェというのもあるんですけども、どちらもとてもいいなと思います。また、学校も有効だと思います。イメージとしては、場所よりも人で盛り上げていくということがとても大切だと思うんですけども、諸事情とか中身のことがよく分からないので、実際、どういうふうにやったらいくんだらうというところは、まだ私の中では全くイメージが持てない状態です。話合いの中で、自分も今後何かお手伝いができたらなというのも含めて、一生懸命考えていきたいと思っています。

会長 ありがとうございました。

続きまして、お願いします。

委員 商店街の企画を長い間ずっと考えてきていて、意外と難しいと思っていたんです。場の要件とかはW i - F iとか充電器をつければ若者がふらっと立ち寄りやすいけれども、それは何の場所なのとか、やりたいことを伺えばいろいろなアイデアが出てくるけれども、それをどうやって実現するのというのをすごく迷っていました。そういう中で、とにかく小さい形でもいいので、すぐに実践できることをまずやってみるというところに持っていかないと、この議論はいつまでたってもぐるぐるしてしまうのではないかなと思っています。あまりリスクもなく、やろうと思えば来週でもできそうな企画に皆さんと行き着いた感があります。

あと、いろいろ社会活動をやりたい若者は多いんですけども、実際問題、とても忙しくて、アルバイトと比較されたときに、やっぱり収入のあるほうになびいちゃうというのをたくさん見てきました。ですので、一見美しくて、社会活動ができる、経験値が残るでしょうというのは、あまり説明になっていかないと思うので、ちゃんと収入を得て、インセンティブを得て、仕事としてスキルアップできるみたいなもので多様な若い人たちを内包できる企画だといいなと考えています。

会長 どうもありがとうございました。

それでは、お願いします。

委員 私も、とにかくやってみることが大事なのかなと思っています。実は先日、さっ

きご紹介があったシンポジウムにも出てみました。若者の声を聞くとか、あるいは若者に伝えるというテーマではあったと思うんですけども、なかなか難しいなというのが現実で、現にこの場にも若者はほとんどいないです。大人が中心になって若者にどうしたらいいかということ議論しているわけですが、これはある意味しようがないのかなと思いつつ、なるべく若い人の意見を聞きながらやりたいなと、やるべきじゃないかな、やったほうがいいんじゃないかなという気がしています。

先ほど北区の例をご紹介したときに、場所が大事だというニュアンスで申し上げました。世田谷区の場合、恒久的に使える場所のアイデアは、現状ないんだと思うんですけども、北区の場所はどこかという、赤羽駅の目の前の商店街ではなくて、ちょっと駅から離れているんです。歩いて行けますが、バスで数分ぐらい離れていて、この商店街は小委員会で出ていた下北沢とか、三軒茶屋とか、ああいったイメージでは全然ないんです。それでも人が集まるということで、聞くところによると、口コミとかSNSで広まっているらしいんです。世田谷区でそういう場所が現状ないとしたら、モデル事業としては短期的でもいいので、やはり若者が集まりやすい場所を確保して、まず、そこでやってみることが大事なのかなと。なるべく若い人に参画してもらって、若い人の意見を尊重していくということかなと。上から目線の大人がこうだろうとか言うんじゃないかなと思いました。

以上です。

会長 どうもありがとうございました。

それでは、若者委員からお願いいたします。

委員 私は、モデル事業案2のコミュニティカフェのグループで参加したんですけども、私もまず、気軽さというものが一番大事だなと思っています。それはアクセスのしやすさであったり、コミュニティカフェの中にいる人がどんな人なのかをもっとオープンにして、若者が気軽に行けるというのも大切かなと思っています。例えば、世田谷区役所の人の中にいますとか、こういう委員の人が中にいますというんじゃないくて、行って見て、若者が一緒に大人の人とおしゃべりしていたら、実はその人がここの青少協の委員だったとか、後から知れるみたいな、そういう気軽さを持って話せるというのも大切かなと思いました。

あとは、若者の視点でというのが大きなテーマになっているという点でも、大人と若者は考え方もちょっと違ってくると思うので、今日も私1人しかいないんですけども、若

者も参加しやすいように、もうちょっと気軽さが必要かなと思いました。

会長 ありがとうございます。

それでは次に、専門委員の方々からご意見をいただければと思います。

委員 まず、若者支援シンポジウムのお話をちょっとだけさせていただいて、それから今回の話にしたいんですけども、両角達平さんという研究者の方がコーディネーターをなさって、当日もパネラーの人たちとすごく良い論議をされていました。私は当日の前の打合せに同席しまして、そのときにおっしゃった言葉がすごく印象的だったので、こちらの委員会でも共有させていただきます。スウェーデンは余暇活動が一番なんですって。ですから、日本で若者支援の居場所は「第3の居場所」と言うけれども、スウェーデンの場合は「第1の居場所」なんです。学校がそれこそ第2、第3、第4の居場所で、学校が済んだらみんな余暇の活動に参加して、その場でよりよくするために自分の意見を反映していく国なんだという話をされていて、余暇の活動が第1の居場所ねと思ってすごく感動しました。

それで、私は子ども・青少年協議会の委員を務めるのが初めてなので、びっくりしました。こんなに何回もみんなて論議を尽くすとは予想していなかったんで、すごく討議をするんだ、それも短時間の中に、普通は知り合うまでが時間がとてもかかると言うんですけども、知り合う間もないけれども、みんなてディスカッションをするという、それぞれの皆さんのすごさをとてもいいなと思いました。

私は今期初めてのこともあり、モデル事業そのものの、理解があまりできていないなと思ったんです。モデル事業と言われたときに、大局の観点からではなく、自分ができること、自分がやれること、それで、その後も引き続きやれることというふうにしかな考えられなかったんで、委員向きじゃないなと思ったりしました。

それで言うと、私は学校カフェのほうが、自分事として考えやすいかなと思ったんです。ただ、私は学校が嫌いなんです。好きじゃない場所なんです。だから、学校に行きたくないというお子さんもいらっしゃるけれども、すごく分かるんです。本当行きたくないよね、行かなくていいよとすぐ言っちゃうタイプなので、学校カフェをつくる時はその配慮をものすごくしないと、なかなか難しいなというのがあります。私は長いことパートで小学校のBOPで働いていたんですけども、何十年前か、児童館とか学童クラブがほとんど全部地域にあったときに、学校の中に入れ込んだんです。私はそれに反発がすごくあって、今までは学校に行けない子が地域の学童クラブに来られたのに、学校にあるば

かりに行けない子ができたりというのを体験していたので、全部学校に入れ込むのが本当にいいのか思ったりもします。商店街は経験から、なかなか難しいというのが分かるので、どうやったらいいかは分からないけれども、商店街のほうは頑張っただったほうがいいなと思います。

会長 ありがとうございます。

続きまして、お願いいたします。

委員 私はコミュニティカフェのほうで主に議論に参加させていただいた中で、やはり若者が地域に関わると言っても、実際、何をしたらいいのかということで、どう関わればいいのか分からない人も多いかと思うので、このコミュニティカフェを通じて、一つ地域に関わるきっかけづくりというか、多様な人に出会う場というか、とにかくハードルを低くすることが大事じゃないかなと感じました。そこにいる出会う人たちからいろんな話を聞いていく中で、何か興味が湧いてくることだとか、すごくいい出会いがあったりだとか、そこで地域での動き出しだったり、グループに関われるきっかけを与えてみて、一緒にやってみるとか、そういう参画・参加できる機会をこのカフェを通じてつくってほしいと思っています。ただ、場所の問題だったり、あとは継続して運営していくための仕掛けといたしますか、仕組みづくりは、ここの会議の場で何か議論ができればと思っています。若者が主体的に動いていってもらいたい場でもあるので、インセンティブの話も出ていましたけれども、なるべく若者が参加しやすい仕組みづくりも必要ではないかと思っています。

以上です。

会長 ありがとうございます。

続きまして、よろしく願いいたします。

委員 僕はコミュニティカフェのほうに入っていますが、若者の主体性をどう育むかというところがすごく大事ななと考えています。主体性、自分から入っていきこうという気持ちをどういうふうにつくっていくかということ、もちろん場所とか、近いとかいろいろあるとは思っているものの、一番はそこに仲のいい友達とか、話せる誰かとか、尊敬する先輩とか、魅力的な人ないしはそこに関係性があるから行きたいなと思うんじゃないかなと思います。それをもっとスムーズにさせるために、近い場所とか、魅力的な内装とか、いろいろあるんじゃないかなと考えています。だから、そういう人と人の関係性、若者と地域の人たちの関係性を、商店街の一つのマーケットの中でどういうふう構築していくかとか、

そういった関係性のデザイン的な視点でこのプロジェクトに当たっていくと、いい基盤が
つくれそうだなと考えています。具体的に言うと、どのくらい話したのかというところが、
例えば、見える化されている何かがそのカフェの中にある状態で、これだけの人と関
わったんだよねということが分かるとか、そういうコンセプトを持って一つ一つ落とし込
んでいく。そもそもそれでいいのかを含め若者と一緒に考えて、大人も同じ立場で一緒に
ディスカッションして進めていけるようなものでもいいのかなと思いました。関係性があ
るから、その後、意味がそこに形成されていくというイメージを持っていて、先にこの意
味を考え過ぎてしまうと、破綻しちゃう部分もあるかなというのがあります。

ついこの前聞いた話ですが、公園の看板とかにも、これは駄目、あれは駄目と書いてい
るものの、その近くの人たちがみんな仲よければ、これは駄目とあまり言わないとか、
ボール遊びをされていて怒られないとか。関係性があると、人と人が許容し合うというか、
ちょっと優しくなるようなことがあるようです。僕自身もそういう経験がすごくあって。
だから、そういった人間の特性みたいなところに省みて、関係性を育てるような温かな場
所にできたらいいなと思っていますし、それが最終的にコミュニティカフェなのか何なの
かというのは、もはや若者と一緒につくっていくものだと思っています。

あと、1週間、2週間でさくっとやるというのは本当に大賛成で、こうやってなかなか
現場に行けなくて机の上ですずっと会議しているだけだと、やっぱり一向に進まないところ
もありますし、世の中、どんどん現場に出てP D C Aを回していくという形で進めていけ
たらすてきななと思いました。

以上です。

会長 ありがとうございます。

続きまして、お願いいたします。

委員 私は前回の小委員会を欠席してしまいましたので、皆さん、それは本当に申し訳
なかったです。ただ、前期から参加させていただいておりまして、私は学校カフェのチー
ムで今期もやっていきたいと考えております。学校カフェのモデル事業案も様々練られて
いて、あとはこれをどうプランを立てて、実際にリサーチもして、どこでやっていくか
というところを詰めていけるといいのかなと思っています。実際、学校の中でできたらいい
なと私自身もすごくモチベーションになっているところとしては、所属のあるところで何
か違う、ちょっと一息ついたり、先ほど「2.5の居場所」というお話がありましたけれど
も、そういうのが子どもたちの社会生活の場である学校の中で組めたら、アクセスもしや

すいでしょうし、いろんな選択肢を提供でき、本当に魅力的だなと考えています。

ちょっと堅い話になりますけれども、文科省で毎年やっている問題行動調査の中で、いわゆる暴力行為だったりとか、いじめの件数というのはどんどん減少傾向ではあるんですが、不登校だけは8年連続上昇していて、今もう5%近いんです。なので、子どもたちの数は減っているというのもあるかもしれないですけれども、不登校のお子さんの割合も増えているのです。そういった意味で、学校に行きたくないと主体的に自分で決めて生活されているお子さんであれば、それはそれでまた応援できるかなと思うんですけれども、行きたいけれども行けないとか、やむを得ずそういう状況に陥っている子ども、若者がいたら、何とかつながりをつくる手だてとして、学校カフェはとても有意義な場所になるんじゃないかなと思います。

あと、これまで皆さんのお話を伺っている中で、学校の中でやるにしても本当に継続してできること、あとは安定して参加できる人をどう確保するかというところ、関係をつくれるというのは、この会議もそうですけれども、どんどん会う機会が重なる中で知り合いになれたりですとか、そうやって親近感を持てたりというのがあると思うので、そういうのを大事にカフェの事業もしていきたいなと思います。

以上です。

会長 ありがとうございます。

続きまして、またお願いします。

委員 コミュニティカフェについてですけれども、アップスにおいて高校生とか大学生に、地域の方と何か一緒にする？ とか、地域のために何かする？ というようなタイプの若者に聞いてみたところ、ほとんどの子がお祭りという答えなんです。お祭りだったら俺らは楽しいし、地域のためにもなるし、いろいろ交流できるよみたいな話がすごく多くて、なので、このお祭りを少し置き換える形でカフェというふうにしていくと、若者は結構主体的にやってくれるんじゃないかなと思っています。

アップスのお祭りは、縁日が今年11月にありましたけれども、そこでも若者が、10個ぐらいのお店を出して、自分たちで全て経済的にも独立してお店を出しているという形なので、場所さえあれば、そこでやってみたいという若者は結構出てくるんじゃないかなと思っています。そうすると、若者はすごく頑張ると思いますし、あとは、そこに一緒に立っていただける信頼できる大人の人をどういうふうにマッチングするのかなというのが一つの課題になってくるのかなと考えています。

以上です。

会長 どうもありがとうございました。

続きまして、小委員会副委員長からよろしいでしょうか。

委員 先ほどもちょっとお話をしましたように、今回の「若者とともに変わる地域」というところでやりたいこと、やれそうなこと、やったほうがいいことは、多数あるのかなと思う中で、でも、取りあえずできるところからやったほうがいいんだろうなと思います。前期を振り返ると、どうしてもコロナ禍ということもあって、実際にモデル事業をできなかったのは非常に残念でした。本当はそこがやれていたなら、今期、もっと実際にいろんな事業が生まれていたということです。今年は終わりますが、1月、2月、3月の早い時期から何か動けるようなことをやっていく。学校カフェのところでも書いてありますけれども、例えば、アップスが学校で今地域との連携をやっているの、そこをうまく使いながら出張アップスみたいな形で、1つ、2つやってみることがもしできるのであれば、年度内でも進めていけると思います。あとは、商店街のほうは逆にどこでやるのかということを含めての調整がきつと出てくると思いますので、そこはいろいろと検討しなければいけないと思うんですけれども、そこを1週間限定で一気にやってしまうのか、もう少し丁寧に時期を重ねてやっていくのかということ、小委員会の中での今後の議論にはなると思います。いずれにしても、夏前までにモデル事業がうまく進んでいって、それが今後の次の本事業にいろんな形でつながっていけるといいなと感じております。

会長 ありがとうございました。

それでは、副会長、お願いいたします。

副会長 皆様、ありがとうございました。小委員会を代表する立場からしますと、フラットな立場で意見を申し上げたいと思いますけれども、今回の「若者とともに変わる地域」という大きなテーマの中で、「あるといい場、取り組み」というものを考えてきたわけです。この「あるといい場、取り組み」というものが何のためにあるといい場なのか、何のためにあるといい取組なのかということ考えたときに、やはりどうしても、これは地域の中に抱えている問題解決なんだろうと思うわけです。先ほど不登校のお子様が増えているという話もありました。北区のあかしやの話をさせていただくと、小学校5年生になっても、あるいは中学校に入っても、実は掛け算とかそういったところにつまずいている子どもたちがいるという問題もあります。また、桐ヶ丘中央商店街に朝集まってくださっている高齢者の中には、何とか日常生活の買物はできるけれども、ちょっと大きなもの

はとてもじゃないけれども1人では買物に行けないという、我慢せざるを得ないという、そういう問題が地域の中にたくさんあるわけです。こういうことをやっぱり若者に知ってもらって、それを若者と一緒にどうしたらいいかなというのを考えていく、そういった場所のプラットフォームとして、学校であったり、商店街であったりというところが使えるといいのかなと思っています。

また、今回、小委員会の中でモデル事業を検討するに当たって幾つかの柱があったわけですが、継続性という観点からしますと、社会福祉の関係者と協働していくことはすごく大事だと思うんです。特に社会福祉協議会の方々との連携は、このモデル事業をやっていく上でもとても大切になってくるかと思います。先ほど、桐ヶ丘のあかしゃの話が出ましたが、空き店舗を借りているので、お金がかかります。この家賃はどこから出てくるかという、社会福祉法人の公益事業としてやっていただいているんです。社会福祉法人は、それぞれの社会福祉法人の強さがある、例えば、自分のところの社会福祉法人は子どものことに関してはよくやっているんだけど、高齢の方はよく知らないとか、逆に特別養護老人ホームを運営している社会福祉法人は、そこは分かるけれども地域のことを分かっていないとか、そういったことがあるので、ここ数年間の社会福祉法人改革の中で、社会福祉法人はもっともっと地域のために何かやらなきゃいけないというのが法人改革の中で出てきているんです。何をやっていいか分からないという法人がいっぱいあるので、そういうところからもお金を出してもらって、こういう場所を借りているんです。まさに、社会福祉法人の地域貢献として場所を借りてもらっていて、その運営を地域の社会福祉法人、社会福祉協議会がお手伝いをして、場所があるからみんなが関わってきて、場所があるから問題もいろいろ持ち込まれてきて、問題が見えるから若者が何とかしたいねということで、このクリスマス会を企画するとかという流れができていくわけです。世田谷区でも、そんな流れができるようなモデル事業の種が見つかるといいのかなと思っています。次第です。

以上です。

会長 ありがとうございます。今まで小委員会に参加している方々の議論は、今回も刺激的なお話がありました。そして、議論の行方をお話しいただきました。

続きまして、協議会委員の皆様よりご意見、あるいはご質問、ご感想などをいただきたいと思います。まず、区民委員から何かご意見、あるいは質問等がありましたらお願いいたします。

委員 私は上野毛地域の町会長をしております、町会長は何から何まで非常に幅広く請け負っておるわけなんです、今日お話を聞いていますと、高齢者の関係とよく似ているなど。高齢者もさっきお話があった社協でカフェをやったりしております。それと私も、先ほどお祭りというお話がありましたが、みこしの会長もしております。ただ、2年みこしが出せない状況で、お子さんのみこしも出せない。町会はこのところ何にもやっていないというお叱りを受けるんですけれども、コロナで集まることができないということで、ご勘弁くださいというご説明をして終わるんです。少しコロナも落ち着いてきましたので、来年の1月9日、49回目の新春マラソンということで、縮小した形で、お子さんたちから大人まで白バイ先導で町内を走るんですけれども、何とかマラソンはやりたいなとは思っております。ただ、オミクロンがどうなるのかちょっと不安ではあるんですけれども、一応、小学校も借りたりして予定しておるので、そういう事業を少しずつ町会としてもやっていくという形です。子ども祭りも1日なんですけれども700名ぐらいがご参加いただいたり、あと、その前に、ラジオ体操を朝の6時半のNHKの放送に合わせてするんですけれども、5日間やって延べで千五、六百人です。そんな形でお子さんとお父さんたちは会社に行く前に出ていただいたりして、5日間出るとそれなりのお土産をつけてあげるという形で、結構いい形なんですけれども、今、このコロナで何もできないというのが現状でして、来年はそういうことがないように、いい年になってほしいなと願っておりますので、よろしく願いいたします。

会長 どうもありがとうございました。

それでは、区議会議員の皆様から、今までのご発言に対してご質問、あるいはご意見でも結構ですけれども、よろしいですか。

委員 ご紹介いただきました阿久津です。

この間、小委員会に出させていただいて感じたのが、なかなか若者がいないということ。「若者とともに変わる地域」というものを議論していながら、なかなか若者の意見を吸い上げられていないのかなというのがすごく不安に感じる場所です。ぜひ、次回以降、この会の特に肝となる小委員会の場にはせめて若者がもう少し参加できる環境を事務局の皆さんには整えていただきたいなと思います。

とはいえ、ここまで具体的に事業ができてきたので、一つずつ着実に進めていただきたいと思います。その中で、先ほど海外での余暇活動のお話がありましたけれども、私も少ない海外経験を思い起こしてみると、各町々にスポーツクラブがあったりとか、教会があ

ったりとか、あと、世田谷の姉妹都市のバンバリーを訪問したときには、サーフクラブがあってビーチがあるんですけども、そのビーチに週末に子どもたちが集まって清掃活動をしたり、多分、ライフセービングが主な取組なんですけれども、夏場はそういった形でビーチの安全を管理したりとか、週末になると、そこでレクリエーションしたりとか、お年寄りから小さい子まで週末に集まる場があるんです。それで、日本の子どもたちはどうかと思って見ると、学校と、家庭と、せいぜい習い事に行くぐらいで、昔は町会だったり、地域だったり、子ども会があったり、神社だったりというところがそこを補っていたんでしょけれども、今そういうものがだんだん薄れてきています。今回のこの取組が最終的に「若者ととともに変わる地域」を目指すのであれば、今、また生まれつつある事業が、最終的にそういったところまで、子どもたちが地域でいろんな経験をして、習い事で物事を覚えるだけじゃなくて、様々な人生経験をして様々な人たちと触れ合っていける、そういった取組まで昇華していくといいのかなと思わせていただきました。

会長 ありがとうございます。

続きまして、いかがでしょうか。

委員 高橋でございます。小委員会の皆様のご苦勞をいろいろお聞かせいただきまして、非常にありがとうございました。

まずは、お話のあったとおり、やることによって次どうしたらいいかということになっていくんだろうと思うので、何かしら始めることがやっぱり一番大事かなと感じます。議論をしても、ああじゃない、こうじゃないと、いろいろ障害になることばかりが出てきますので、まずはどうやれるのか、小さくてもいいからまずやってみようというところから次のものが生まれるかなという感じはするんです。

僕もお話を聞いていて、今までこの協議会に入ったことがなかったものですから、皆さんがお話されている「若者」とは、子どもですか、それとも中学生ですか、高校生ですか、大学生ですか。「若者ととともに地域が変わる」であると、思春期以降の若者の世代がどう地域に関わるか。小学校とか小さい子どもは親と一緒にあって地域には出てきますので、うちの町会なんかもそうですけれども、それ以降になると、親と離れてからがどう地域とつながるのか。いろいろ見ていると、何か気軽に来られる場所があれば来るかと言ったら、そうでもないような気がします。やっぱり自分にとってどうなのかということが、目的が明確になっていないと、そこに行ってみようというふうにはなかなかならないかなと感じてはいるんです。先ほど言われた何のためなのかというのがないと大分違うんじゃないかな

ないかなと感じます。

思春期から青年期に入る頃に大事なのは、いい出会いができたかどうかでその後の人生は大きく変わると言われています。世田谷区で認知症の条例をつくったんですけれども、認知症になっても、思春期から青年期の本人にとって一番人生ががっと変わるぞという瞬間のいい思い出は、しっかり覚えているというんです。だから、そういう意味では、この世代にどれだけの刺激や憧れる人、こういう人になりたいとか、そんなことと出会う場ができるのが、その後の人生に大きな影響を与えるのだと思います。そういう場があるんだ、そういう人がいるんだということが、まずはどんどん変えていければありがたいんじゃないかなと感じてはいるんです。

先ほど委員が言われたアップスで縁日という話は、縁日が始まる前にのぞいたんですけれども、やっぱり準備している若者たちは生き生きとしてやっていました。大学生とか、高校生とかそういう子たちが、これで楽しみながら誰かに何かを与えられるという思いが、目的があるから、ああやって生き生きできるんだらうなと私はそのときは感じたんです。

会長 どうもありがとうございました。若者の定義ですが、この会でずっと議論しているのは、39歳ぐらいまでの人たちを入れております。ひきこもりである若者、生きづらさを抱えた若者、その人たちが何とか表に出てくることができるようになり、そして共に地域活性化をしていきたいということでございます。

では、続きまして、お願いします。

委員 皆様、お疲れさまでございます。中山と申します。小委員会も1度だけ参加させていただいて、大変濃い時間で、ぎゅっとやるんだなとびっくりしました。

これまでのお話を伺っていても、まず、学校カフェに関しては私も大変関心があって、というのは、私も子どもがおり当事者でもありますので、個人的に議員になる前に、区内で学校に関してとか、教育に関しての様々なイベントをやったときに、グループトークで5個ぐらいに分かれたグループのうち、3つが学校にカフェがあったらいいという協議結果があったことを今思い出したんです。かつ、世田谷区の学校は地域運営学校ということになっていますし、地域に開かれていかなきゃいけない。特に中学校は、私立への進学率が世田谷区は高いほうなので、地域のお友達だった子とも遊べなくなってしまうたり、出会う場がなかったりします。でも、地域の学校に地域の子どもが私立に通っていても行くというのは、私はいいんじゃないかなとずっと思っていて、その際のハブになるのがカフ

エ。どういう形がいいのか、予算措置がどうなるのか、私は分からないんですが、先ほど出張アップスの話があったように、アップスみたいなところの感覚が学校の中に少しあるのは良いなと思います。私も1校でもいいので、早くやっちゃったらいんじゃないかなと思いました。不登校も世田谷区は小中学校で1000人近くなっています。この1000人は、文科省のカウントの仕方での1000人であって、ご相談いただく中で、潜在的には、もっと明らかに不登校だろうと思われる子がカウントされていない場合もあるんです。だから、そういうことも踏まえて、先ほどの何のためにというところでいくと、地域の課題解決、教育の中に福祉的な要素を持っていくというもののきっかけになったらいいなと思いました。

あともう1点は、今、経済産業部でもSETAGAYA PORTと言って若者の起業支援をすごくやっていて、その若者とここでの若者は、やっぱりそれぞれ所管も違いますし、描いている若者像がすごく違うなと感じています。それは、大学生の方でも世田谷なら起業をできるように支援しようとか、もしくは大学を出てから、社会人を1度やってみただけでも、雇われない生き方をするという若者だったり、そういう支援も世田谷区ではやっているんですけども、恐らく小中学生から39歳とあるけれども、ちょっとターゲットが違う若者なのかなと、世田谷区内で言われている若者という中では、すごくイメージが違うなと感じました。この事業案2、商店街も含めて、商店街も今歯抜けのいわゆるシャッター商店街が増えていますし、そういう社会課題と、高校以上になると地域から離れてしまう若者たちの問題もありますので、まず、こちらもできることをやってみたらいいんじゃないかなと思いました。

以上です。

会長 ありがとうございます。

それでは、続きまして、お願いいたします。

委員 田中優子です。前期から参加させていただいておりますが、今回、小委員会の方々、本当にお疲れさまでした。出たいなと思いながらなかなか出られず、資料だけ拝見したんですけども、今、資料全体に目を通して、キーワードはカフェなのかなと。中には議員カフェなんていうのも入ってしまっていて、面白いなと感じました。やっぱり食とか飲み物は、人を引っ張る餌と言っては何なんですけれども、そういう何かが必要だなと思ってしまっていて、あともう一方で、イベント、お祭り、そこは模擬店みたいなものとか、ゲーム性のある楽しいこととか、何か体験できるような具体的なものがないと、人はなか

なか立ち寄らないのかなと思います。学校カフェにしても、駄菓子販売、それからコミュニティカフェ、今回、最終的に残ったモデル事業はすごく具体性があるって、やってみたらいいんじゃないかなと感じました。それには、場所を借りるんだったら家賃はどうなのとか、お金がかかるよねということがあるので、私たち区議会議員が何のために参加しているかといったら、そういうサポートができなければ意味がないのかなと、プレッシャーとともに感じています。ですから、行政に対して、区民の代表として議会からも、せっかくこういう話や提案があるので、何とかサポートしてもらいたいということを行政には働きかけるつもりでいます。ぜひ皆さんの意見とか、議会サイドとか、いろんなところからのパワーでいいことができたらいいいんじゃないかなと感じました。小委員会の皆様は本当に大変だったと思います。ありがとうございました。お疲れさまです。

会長 どうもありがとうございました。協議会の委員の方々からご意見をいただきました。

この際、もっと言うとおきたいという委員の方々がいたら、どうぞ自由にご発言いただきたいと思いますが、いかがでしょうか。まだ時間はございます。

委員 先ほど委員がおっしゃってくださったんですけれども、資料3の上の丸のところに、庁内連携・官民連携が構築できる体制とあるんです。やはり若者支援にはここが欠かせないと思いますので、予算の面でも、ほかのところから多分予算を引っ張ってこられたりすると思いますので、いろいろお知恵をいただけたらなと思っておりますので、今後ともよろしく願いいたします。

会長 プレッシャーをかけ続けるということですね。議員の先生方、よろしく願いいたします。

ほかにはございませんでしょうか。かなり実のある議論ができて、それぞれの委員の方々の熱い参加への意欲が感じ取られました。

若者委員は、今日、一人しか授業の関係で来られていないのですが、何かもっと言いたいことはないですか。

委員 確かにモデル事業を早速やってみるのが大事かなと思って、その場合はカフェになると思います。私はコミュニティカフェのほうで議論させていただいたんですけれども、学校カフェとかだったら割とカジュアルにできるかなという印象を持ったので、来年になって1月、2月あたりでモデル事業をやってみて、そこで出た問題をまた議論してという感じがいいかなと思います。

会長 小委員会副委員長、どうですか。

委員 今日、若者委員は日程の問題で一人しかいないことを申し訳ないなと思っていて、一応、小委員会のほうは、今後のところは全部大学生が出られる時間帯で設定が、1月、2月、3月はされていたと思いますので、そこの中で議論しながら、また実際にやるときには、若い世代がきちんと参加できるようにはしていきたいというところはありません。

実際に、内閣府から出ていますけれども、子ども施策の方針、こども家庭庁の関係のところの方針の中でも、当事者である子ども・若者の声を、意見をちゃんと聞くというところ、あとは子どもの権利をきちんと保障することが国の方針としても文言としてはきちんと出るようになっていきます。とはいっても、世田谷区はむしろそれよりもっと前からこういうことをやっている中で、やはり子どもや当事者世代、若者の声をもっと聞くことはしていかなければいけないのかなと思っております。

また、先週土曜日、私も若者支援シンポジウムに参加させていただいているんですけども、その中で、いろいろな実践事例がありました。若者自身が社会の一員とを感じる感覚を持てるかどうか、要は、ただ単なるお客さんではなくて、自分もこの地域で暮らしている一員だよなということが、そういった当事者性がすごく大事だよなと。あと、また今回、テーマで参加とまでは言っていないものの、社会参加しなくちゃいけないと押しつけるものではなくて、いるのが大事なんだよという実感がすごく大事だという話が、イベントの中でもいろんな方が、いろんな形で、言葉で表現されていて、まさにそうなんだろうなと。どうしても私たちは、大人目線というか、上から、こうしたほうがいいんじゃないのとやりがちな部分があります。若者の年齢は結構幅広い部分はあるながらも、10代、20代ぐらいかなとは一応私の中では思っているんですけども、その世代が、いわゆる引き籠もっているとか困っている若者だけというよりは、逆に、いわゆる普通の、でも、どう地域と関わったらいいいのか分からないというか、そういう経験があまりない層がすごく多いんだろうなと思っています。そうした若者がこの世田谷で生活していてよかったなとか、その一員なんだと感じ、その中で自分がどう地域をつくっていくのか、そういった場面を今回のモデル事業の中で少しでも実現しつつ、世田谷区全体でいろんな形で展開できるようにしていきたいと思っています。先ほど委員の皆さんからもありましたけれども、まさに、取りあえずやってみて、トライアンドエラーで次どうしたらいいのかを議論していったほうがいいのかと今日感じました。

会長 ありがとうございます。

副会長、どうですか。

副会長 ありがとうございます。実は、北区は中高生世代の支援が弱いんです。あかしやに来ていただいたときに、事務局から世田谷区の様々な取組のパンフレットを社協の職員に見せたところ、やっぱり世田谷の中高生ぐらいの年代の子どもたちに対する支援は羨ましいですとおっしゃっていました。そうやってお互いに学び合うことはすごく大事ななというのを、今回1回だけ視察に来ていただいたわけですが、そこでも感じたんです。ここで今いろんな意見をいただきましたけれども、取りあえずモデル事業をやってみて、それをいろんな人に見てもらうことも大事なかなと思いますので、ぜひ動かして、宣伝して、いろんな方に来ていただいて、そこでまたどんどんとりモデルしていくような取組が出来上がっていくといいかなと思いました。

先ほど、若者って一体誰なのかというお話もありましたけれども、若者はいろんな役割があると思うんです。引き籠もっているような若者にも、そういう方々が、何かやっている、そして、そこに同年代の人たちがいて、もしかしたら、先ほどの話じゃないですけども、中学はばらばらになっちゃったけれども、かつて小学校のときにはあの人たちは一緒にいたよねとか、その人たちが困っている地域の子どもたち、困っている地域の高齢の方々に対して何かやっているから、困っている人たちがいるんだったら、自分たちも何かできるんじゃないかという出てきてもらうきっかけにもなるかもしれない。つまり、若者同士が循環していくような、お互いに引き合っていくような循環が、モデル事業を始めていくことによって出来るのかなという期待を大いにしているところです。

小委員会の委員長としては非常に荷が重いんですけども、皆さんのお力を借りて、この後も議論を進めていければと思っているところでございます。よろしく申し上げます。

会長 ありがとうございます。それでは、私のほうから、今後の展望について、今日皆様から出されたご意見を踏まえて、まとめていきたいと思えます。

先ほど、委員から出された教育の中に福祉的要素をとということですが、実は、この考え方はこの協議会が始まって以来ずっと貫かれていました。教育と福祉の統一的保障をしていこうといことです。ただ、区役所の縦割り行政の中でそれが不可能だったということも率直に言っております。しかし、課題として、今後、ますます重要であると捉えていかなければならないと私自身も思っています。

この2つのモデル事業を進めるに当たって皆様から出されたご意見は、まず、出会い

のハードルを低くしようということです。それから、一緒にやっていく、楽しむ、それと場所の継続です。まずやってみよう。そして、その場所に行ったら信頼できる人がいる、これが大事だということが各委員から出されました。信頼できる人、つまり我々が信頼されなければいけないわけです。若者に勇気と希望を与えていくのではないかと思います。私の実感として、前回も申し上げましたが、コロナ禍で学生の引き籠もりが非常に多くなっています。オンライン授業はそれを助長させてしまったなとも思っています。もちろん、オンライン授業は良い点もありましたが。しかし、若者が大学に来たいのだが、怖くて行けないという実態もあったのです。そのような学生に対して、大学は様々なツールを駆使して対応していますが、それでも悲痛な叫びが聞こえてきます。それに対して、私個人としては何もできない。メールで、学校のネットで、その病気とうまく付き合ってくれと、病気を個性だと捉えてもいいのだよと、課題を出しながら答えてもらうというもどかしさを感じています。

ですから、本日議論してきたような場所に来てもらえる若者が増えれば、うまく皆さんが対応してくださるという期待を持っています。そういう意味で、先ほど丹羽委員がおっしゃったように、この2つの出されたモデルを早く進めていくことが大切だと思います。林委員からも、1月、3月に取りあえずやってみようということになりましたので、ぜひこれを進めていっていただきたいと思います。

ということで、今日、皆様から議論いただいたことは十分に反映していけると思います。

以上で、私の進行はこれで終わりたいと思います。事務局に進行をお渡しします。どうぞよろしくお願いいたします。

事務局 会長、また委員の皆様、ご議論いただきまして、ありがとうございました。

本日いただいたものにつきましては、また、次回以降の小委員会で議論をさらに深めて進めてまいりたいと思います。

次回の協議会ですけれども、次第の下、今後の予定にございますが、年度末の一番最後の日になって大変恐縮なんですけれども、来年3月31日水曜日を予定しております。

また、小委員会の日程につきましても、資料5にもございますが、ご確認いただければと思います。また時期が近づいてまいりましたら、開催通知をこちらからお送りさせていただきます。

それでは、閉会に当たりまして、事務局を代表して、子ども・若者部長の柳澤よりご挨拶

拶申し上げます。

事務局 長時間にわたりましてご議論をいただきまして、ありがとうございます。また、小委員会の皆様には、この間、ご議論を深めていただきまして、ありがとうございます。また、協議会委員の皆様も小委員会にご参加いただきまして、本当にどうもありがとうございました。

居場所ということで、行きやすいところだったりとか、また、何度も行ってみたいなとか、何かあったら行ってみたいなとか、そこでの同世代での出会いもったり、あるいは大人との出会いであったりとか、そういったことでいろいろ広がっていくということがもし図られるんだったら、これはいいなと思っております。とにかく早くやってみようというお話もいただきましたので、事務局としても精いっぱいサポートさせていただきたいと思しますので、どうぞよろしく申し上げます。

本日は、どうもありがとうございました。

事務局 それでは、以上をもちまして今年度の第2回世田谷区子ども・青少年協議会を閉会いたします。ありがとうございました。

午後4時34分閉会